高山（たかやま） 慶子（けいこ）

2023.7.30

史料を守り歴史を伝える

今から3年前の2020年、本県では8月にとちぎ歴史資料ネットワーク（通称・とちぎ史料ネット）、10月には那須資料ネットの二つのボランティア組織が誕生した。

歴史資料すなわち史料とは、考古学、歴史学、民俗学、自然科学など、あらゆる方法で、人びとの営みや地域の特徴を歴史として明らかにするためのものである。一見してそれと分かる和紙に墨書きの古文書だけではなく、印刷物・出版物や写真・アルバム類、民具など、歴史資料は実に多様である。

ごく私的な家族写真と思っていたものでも、その家族の背後に今はなき町並みが写っていれば、かつての地域の姿を伝える歴史資料になる。今でこそ、買い物をしたお店で出されるレシートを、すべて受け取り保存している人はいないであろうが、100年前、200年前の領収書の束が見つかれば、その当時の人がどのような生活を送っていたのかを知る手がかりとなる。

事務的な記録と思われがちな学校日誌も、丹念に読み解けば、学校を取り巻くかつての地域社会の様子が浮かび上がる。このように歴史資料は案外身近な所に存在する。

さまざまな歴史資料の中で、国や県、市町村等が文化財に指定したり、博物館等の公共施設に収蔵されたりしているもの、つまり私たちが負担する税金で公共の財産として保存・活用されているものは、実はごく一部に過ぎない。大半の歴史資料は、個人宅や民間の商店・会社などに、人知れず存在している。そこに災害が襲ったとき、歴史資料も被災し、その多くが失われていく。

こうした災害時に、歴史資料、特に行政の手が届きにくい、民間に所在する未指定の文化財を救出しようと立ち上がったのが史料（資料）ネットである。国内初の史料ネットは、1995年の阪神淡路大震災を契機に誕生した歴史資料ネットワーク（通称・史料ネット、事務局・神戸大学）である。普段から歴史資料の調査と解読に取り組む日本史研究者を中心に、被災地で歴史資料の救出のためにできることを手探りで見いだしていった。

この時から約30年。今では30以上の史料ネットが全国各地で活動している。組織の規模や活動内容、運営方法などは多様であるが、歴史資料を守るという目的は共通している。

大きな災害に見舞われた時には、人命救助と生活再建が最優先である。また、歴史資料が失われるのは災害時だけとは限らない。所蔵者の世代交代や家屋の建て替え・改装時など、歴史資料は常に廃棄・消滅の危機にさらされている。

混乱する被災地で、また常に歴史資料が失われゆく現状で、史料ネットにできることは、ほんのわずかなことなのかもしれない。それでも、私たちが日々の暮らしを営む地域が、歴史とともにある豊かな社会であり続けることを願って、歴史資料を守り伝えていきたい。

（宇都宮大共同教育学部准教授、とちぎ史料ネット代表）